

論文

いわゆる「構造改革論」の理論的性格 (六)

山本二三丸

まえおき

一 「構造改革論」者による説明

- 1 「構造改革」の意味……………(以上、第十六卷第四号所載)
 - 2 「構造改革」の具体的内容……………(以上、第十七卷第一号所載)
 - 3 「構造改革」の条件
 - (イ) 国家独占資本主義……………(以上、第十七卷第二号所載)
 - (ロ) 政治的民主主義……………(以上、第十七卷第四号所載)
 - (ハ) 戦後世界の構造的変化
 - (i) 「資本蓄積の法則」……………(以上、第十八卷第一号所載)
 - (ii) 世界の構造的変化
 - (iii) 「平和と戦争の問題」……………(以上、本号所載)
- 二 「構造改革論」の理論的性格
- いわゆる「構造改革論」の理論的性格 (六)

三 要 約

一 「構造改革論」者による説明(つづき)

3 「構造改革」の条件

(ハ) 戦後世界の構造的変化

(ii) 世界の構造的変化

さて、佐藤昇氏は、「構造改革」の「第三の条件」についての説明の前半において、「資本蓄積の法則」なるもの的重要性を指摘し、「資本の蓄積がすすめばすすむほど資本の支配力は強まり、労働者階級の抵抗力も強まる」という「二面的な過程」こそが「資本蓄積の法則」の最大最強の眼目であると指摘したものである。ところが、この指摘につづいて、その後半ではなに出でるかと思えば、「資本蓄積」という言葉だけをつかって、舞台を世界に移し、ここでも「資本蓄積の法則」が相変らず貫徹することによって、はじめて「労働者階級と資本家階級との力関係」が「一変」することができた、と「結論」づけているのである。ここには、独特な論理的テクニクが見られるだけでなく、はなはだ注目すべき「世界的援用」が利用されているようでもあるので、前段と同様、各文章ごとにたちいった検討を加えることが必要かつ適切と考えられるのである。

①「その歴史的な発展のあとを見ると、資本の蓄積過程のなかで独占が成立し、資本主義の帝国主義段階への移行が生じ、世界帝国主義体制が成立し、その矛盾によって世界戦争が起り、世界帝国主義体制の弱い一環がぬけ落ちることによって、ロシアに社会主義がうち立てられるという過程をたどってきた。」——まず最初の「その歴史的な発

展のあとを見ると「いう文句に注意されたい。いったい、「その歴史的な発展」の「その」とは、なにを指していつているのか？ この文句の前にあるのは、「資本蓄積の法則はこのような階級対立と階級闘争の激化として貫徹してゆくのである。」という文章である。この文章そのものがすでに、国語的・論理的にみただけでまったく成り立ちえない迷文であることは、さきに前稿において指摘しておいたとおりである。「階級対立と階級闘争の激化」は、「資本蓄積」の「結果」として——しかも、もっと重要な、他の諸要因と結びついてそれらの「結果」として——はじめて生ずるものである。「資本の支配力の強化と労働者階級の抵抗力の強化」も、したがってまた、「階級闘争の激化」も、「資本蓄積の法則の貫徹過程」ではなく、まさに「資本蓄積」——というよりも、むしろより正確厳密には、資本制的生産の発展、といわなければならぬ——の進行の結果にほかならない。佐藤氏は、「資本蓄積」の「結果」をば「資本蓄積の法則の貫徹過程」そのものととりちがえているのである。ところで、問題は、「その歴史的な発展」の「その」にある。右の前文に照らしてみるならば、この「その」に該当するものは、「資本蓄積の法則の貫徹」と、「階級対立と階級闘争の激化」との、二つ以外にはありえない。これら二つのうち、どちらかといえば、おそらく前者、すなわち、「資本蓄積の法則の貫徹」ということになるであろう。では、「その歴史的な発展」、すなわち「資本蓄積の法則の貫徹の歴史的な発展」とは、いったい、どういうことを意味しうるであろうか？

まず、右の言葉の国語的・論理的意味を考えてみよう。「法則の貫徹」の「歴史的な発展」とは、その「貫徹」そのものが「歴史的に発展」してきたこと、つまり、「貫徹」の仕方が時代の推移とともに発展し変化してきているということにほかならない。ところで、「貫徹」の仕方はどうかといえば、佐藤氏が再三くりかえし強調しているように、それは「資本の支配力の強化」すなわち「労働者階級の窮乏化」とこれに対する「労働者階級の抵抗力の増大」

という、「二面的な過程」以外のなものでもないのである。したがって、「資本蓄積の法則の貫徹」の「歴史的な発展」とは、まさに、資本主義のはじめには「資本の支配力がまだ弱く、労働者階級の窮乏化も進んでおらず、労働者階級の抵抗力も弱い」が、資本主義の発展とともに、「資本の支配力がますます強化され、労働者階級の窮乏化がますます進み、労働者階級の抵抗力がますます強化される」ということでなければならぬ。ところが、「その歴史的な発展を見ると」という文句のつきに出てくるのはなにかといえば、「独占」、「帝国主義」、「世界戦争」、「ロシアに社会主義」といったような言葉ばかりである。これらの言葉が示しているのは、まさに、資本制的生産そのものの発展、いいかえれば、資本主義そのものの歴史的な発展である。つまり、これらの言葉が示している当の「歴史的な発展」とは、「資本主義そのもの」の「歴史的な発展」であって、「資本蓄積の法則の貫徹」の「歴史的な発展」などではないのである。ごらんのように、佐藤氏は、「資本主義そのものの歴史的な発展」をば「資本蓄積の法則の貫徹の歴史的な発展」にすりかえているものである。

「資本の蓄積」は、なるほど、「資本制的生産の発展」と不可分離である。だが、それは、「資本制的生産の発展」のひとつの重要な側面を示しているにすぎない。このことは、たとえば、「資本の集積・集中」という言葉を、右の「資本の蓄積」と並べてみることによって、簡単にうかがい知られる。「資本蓄積」をもって「資本制的生産の発展」そのものと同じだと考えたり、前者をもって後者を代表させたりするのは、⁽³⁵⁾ちょうど、一本の木をもって森全体だと強弁するのとまったく同じたぐいである。

(35) このような見えすいた同一視は、当の論者自身が「資本蓄積」および「資本蓄積の法則」という、二つの言葉について、その正確な意味内容をまったくつかんでいないという事実を動かしがたく示すものである。「資本制的蓄積の法則」——「資

本蓄積の法則」ではない——とは、「資本制的生産の発展」にともなう「資本関係の発展」を、しかもその「必然的發展」を明らかにしたものにほかならない。佐藤氏が「『資本論』でマルクスが説いている資本蓄積の法則」についての「正しい把握が必要である」などと述べながら、「資本の支配力の強化」＝「労働者階級の窮乏化」であるなどと説いているのは、『資本論』そのものを読んでいないことを自分で暴露しているようなものである。

要するに、佐藤氏は、「第三の条件」の説明のはじめに、知りもしない「資本蓄積の法則」などという、素人だましの空文句をかかげて、この言葉ひとつをつかって、「力関係」の「変化」を「合理化」しようとはかったものであること、右の空文句ひとつで、「資本主義の歴史的な発展」の過程を説明しようとして、ここに「暴力的すりかえ」のテクニクが発揮されるの止むなきにいたったということ——これらのことはうたがう余地がないのである。

佐藤氏が「資本蓄積の法則」という、御本人自身にもよくわかっていない空文句ひとつをどんなにたよりにしているかということは、右の文句につづく「資本の蓄積過程のなかで独占が成立し」という文句によってもあきらかに示されている。「独占」が成立したのは「資本の蓄積過程のなかで」あるなどと主張するのは、事実そのものにも合致しないし、理論的にも成り立たないまったくの空語である。「独占」が成立したのは、まさに「資本制的生産の発展」そのものによってであり、とりわけ、「資本の集積・集中」によってである。もし「資本の蓄積過程」のみが進行するとすれば、「独占」が成立するためには、数世紀を要することであろうし、ことによったら、数世紀を費やしてもなおかつ成立しえないであろう。このようなことは、およそ『資本論』の第一巻第七篇「資本の蓄積過程」について眼を通したほどの者ならば、誰しも先刻御承知のところである。

最後の「ロシアに社会主義がうち立てられるという過程をたどってきた」という文句の中の、「過程をたどってきた」という言葉にも、佐藤氏の論法の特徴がいかなんく示されているようである。いったい、「……」という過程をた

どってきた」当のものは、なにか？ 「資本の蓄積過程のなかで……という過程をたどってきた」——この「蓄積過程」のなかで……過程をたどってきた」という、まさに奇蹟的・二重過程者その者はなにかといえ、これが、なんと、またぞろ「過程」——「資本蓄積の法則の貫徹過程」——そのものなのである。つまるところ、こうである。——「過程が、過程のなかで、過程をたどってきた」！！

ところで、ここに見逃すことのできないのは、右のような「全面改革」的迷文を並べたことによって、論者が、「過程」そのものの場面を、資本主義国内部から世界へと、たくみにうつしかえてしまっているという点である。「資本制的蓄積の法則」はまさに一資本主義国内部において貫徹するものであり、「資本制的生産の発展」によって一国内部の資本関係がいかに発展するかを明らかにしているものである。ところが、佐藤氏は、さきに見たように、「資本蓄積の法則の貫徹」という言葉をもって「資本制的生産の発展」におきかえ、つぎに、「資本制的生産の発展」が必然的に一国内部から世界市場への資本の支配領域の拡大を生みだし、かくして帝国主義段階への移行、世界帝国主義体制の成立、その矛盾の爆発、社会主義の成立等々をもたらしたという、「資本制的生産の発展」の「世界史的展開過程」をとらえてきて、これは「資本蓄積の法則の貫徹過程」そのものであるというようにこじつけ、これによって、「資本蓄積の法則の貫徹過程」そのものが右の「世界史的展開過程」となってあらわれたものであり、したがって、当初資本主義国内部における「労働者階級と資本家階級との間の旧来の力関係」は、右のような「資本蓄積の法則の貫徹」なるものによって、世界における「労働者階級と資本家階級との間の新たな力関係」にとつてかわられるにいたったのだ、というようにして、かねて狙いの「新たな力関係」にまんまとこぎつけるという論法を策したものである。「力関係の問題を明確にするため」の不可欠の主役として指名された「資本蓄積の法則」は、「資

本制的生産の發展」そのものになりすまし、まんまと舞台を一国内部から世界に移し、一国内部での「力関係」の世界における「新たな力関係」への發展さえも、みずからの手でつくりだしたものと潜称しているのである。だが、わが「構造改革論」者たちが例によって例のごときペテン論法でどんなに「資本蓄積の法則」の主役ぶりを描き出そうとも、こんなものはすこしも役に立つものではない。本来の主役は、「資本制的生産の發展」そのものであって、「資本蓄積の法則」などは配役から削除してしまっても、舞台での展開にはいささかも支障はなく、むしろ、にせ主役など追っ払った方が筋書きはずっとすっきりするのである。ところで、肝腎の問題は、「新たな力関係」にある。右のにせ主役を狩りだして合理化につとめた当の「新たな力関係」とは、どんなものか？

②「さらに、第二次大戦以後、とくに最近にいたって社会主義は世界的体制に發展し、その経済的・政治的・軍事的実力と威信は高まり、植民地体制の崩壊、全世界的な民主主義運動、労働運動の高揚と相まって資本主義の全般的危機はいっそう激化し、社会主義と資本主義、労働者階級と資本家階級との力関係は戦前とは一変し、前者が世界政治を主動する要因となり、戦争を阻止し、恒久平和をうち立て得る展望がひらかれている。」

ごらんのように、ここには、第二次世界大戦後の世界政治経済の激しい変化が公式的に述べられており、すでに周知のところがくりかえされているだけで、そこにはなんら特異のことはないように思われる。だが、よく注意してみると、そこにはかれらインスタント論者特有のマヤカシ論法が潜んでいることがわかってくるのである。それは、一にかかって、「力関係」という点にある。すこしたちいって吟味を加えてみよう。

佐藤氏は、「社会主義と資本主義との間の力関係」と「労働者階級と資本家階級との間の力関係」というように、二つの「力関係」を挙げ、それらが同時にひとしく第二次大戦を境として戦後に「一変」したと主張している。そこ

で、これら二つの「力関係」について別々に考察を加え、最後にこれら二つの「力関係」が同時に、ひとしく、「一変」したという主張の意味をさぐることにしよう。

まず、「社会主義と資本主義との力関係が戦前とは一変した」ということについて。「力関係」という言葉は、さきに前稿で簡単に指摘しておいたように、きわめて曖昧な言葉であって、多くの論者は、その内容を正確に規定するとなく、その響きのよい調子にばかり力をいれ、曖昧不正確な用法によっておのづと自分の都合のよい結論にひっぱりとむという、悪賢こいやり方をえてして援用しているものである。この「力関係」については、さいわい、わが佐藤氏がさきに「資本蓄積の法則についての正しい把握」についての説明としてわれわれに啓示してくれているので、これを参照することにしよう。佐藤氏は、「労働者階級と資本家階級との間の力関係」について、その内容は、「資本の支配力の強化、資本の重圧の強化、労働者階級の窮乏化、労働者階級の抵抗力の強化」であるとされている。簡単にいえば、「力関係」とは、ここでは、「支配している者」と「支配されている者」との間での、「支配者の支配力」とこれに対する「被支配者の抵抗力」の「釣合」を指し示すものである。ここでもっとも重要なことは、「資本家階級」と「労働者階級」とが同じ資本主義社会の相対立する二契機であり、およそ資本主義社会の存続を前提するにすぎり、「支配者」対「被支配者」という、密接不可分離の関係が現存するということである。つまり、「力関係」の「関係」という言葉は、たんに、甲の力が10、乙の力が5というように、並存している両者のもっている力をただ比較して、10:5という比例を引きだしてみようというように示すものではなく、けっしてない。「被支配者」を前提する「支配者」と「支配者」を前提する「被支配者」とが同じ社会を構成する敵対階級として相互にかたく結びついているその「支配・被支配」の関係における、両者の力の釣合をこそ示すものである。したがって、「支配・被支配」の

関係が存続するかぎり、いいかえれば資本主義社会が資本主義社会として存続するかぎり、「力関係」がどのように変化しようと、つねに「支配者の支配力」は「被支配者の抵抗力」を圧倒するものであることにかわりはなく、ただ、その支配力対抵抗力の釣合が、 $\infty \cdots \infty$ から $1 \cdots 1$ にと、量的に変わりうるだけである。⁽³⁶⁾つまり、厳密に言えば、「力関係」そのものには変化がないということである。そして、もし、「力関係」が「一変」というのであれば、その場合には、「支配者」が「支配者」でなく「被支配者」に変わり、「被支配者」が「支配者」にかわり、さきの「支配者」の「支配力」はいまや「被支配者」の「抵抗力」に変わり、さきの「被支配者」の「抵抗力」は一変して「支配者」の「支配力」になったということではなければならない。はたして、このような「力関係」の変化というのが、「社会主義と帝国主義」との間に生じたであろうか？

(36) ここでは、「支配・被支配」の関係そのもの——つまり「質的」関係——に変化がなく、たんに量的関係についてのみ変化がありうるということを示すために、かりに数的比例を挙げたが、しかしこのような数的比例はたんに説明の便宜のためのものにすぎない。このような数的比例を計算して、「いまや $\infty \cdots \infty$ になった、いま一步で $\infty \cdots \infty$ 、さらに一步すすめれば $\infty \cdots \infty$ になる」などと宣伝するのは、そもそも、「力」そのものについて、まったくいいかげんな解釈しかもっていないことをみずから暴露しているものである。

「支配者」と「被支配者」との「力関係」そのものは、両者のあいだでの「力」をもってする戦いによってのみ、戦いにおける「力」と「力」との対決によってのみ、一変することができる。「力」による「誰が、誰を」の戦いに真剣に取り組むこともなく、「平和」的時世において、——つまり「力」による戦いなど考えなくともすみそうな時期に——普通選挙の票集めをやって「力関係」を一変させようとか、「平和的」民主主義を通じて「力関係」を一変させる可能性があるなどと説くのは、ちょうど、「力」なしで「力関係」を変えようというのと同じく、まったくでたらめの空文句であり、きわめて悪質な、支配階級御用論であるといわなければならない。

第二次大戦後、「社会主義が世界的体制に発展し」たこと、その「経済的・政治的・軍事的な実力と威信が高まった」ことは、疑いのないところであり、これらは戦後における世界情勢の重大な変化であるといわねばならない。だが、はたして「社会主義と資本主義」との「力関係」は、戦後に「一変」したであろうか？　そもそも、「社会主義と資本主義」との間に、「資本家階級と労働者階級」との間におけると同じような「力関係」があったとか、あるとか、いうことができるであろうか？　このような「力関係」があると云うのは、まったく見当ちがいの議論といわなければならない。おそらく、わがインスタント論者たちは、「戦前には資本主義が優勢・圧倒的で支配力を持ち、社会主義はきわめて劣勢で受身であり抵抗力も小さかったが、戦後にはその反対に資本主義が劣勢となり圧倒されて受身となり、社会主義は優勢・圧倒的で支配力を強化するにいたった」ということを主張しようとして、「力関係の一変」と云ったものであろう。だが、このような「力関係の一変」を考えることは、それ自体、まったく誤りであり、事実を完全に歪めるものである。

まず、戦前において、「資本主義が優勢・圧倒的で支配的な力を持ち、社会主義の力がきわめて劣勢で受身であり、抵抗力も小さかった」ということは、事実であろうか？　もし、両者の「力関係」がこのような状態であったならば、「資本主義」は「支配者」となり「社会主義」は「被支配者」となり、両者の間に「支配・被支配」の「力関係」ができてあがるのはきわめて容易であり、また必ずそういう「力関係」が現出していたであろう。だが、事実はそのようではなかった。「資本主義」はその内部に重大な根本的諸矛盾をもっており、たとえ、経済力や軍事力や、数字の上で圧倒的優位を占めていようと、対「社会主義」の「力」の関係では、けっして優勢・圧倒的どころではなかったのである。そして、この社会主義の「力」がまさに「資本主義」の「力」と対等であり、しかも「力」の発動にお

いて前者がはるかに後者よりすぐれていることを実証したものが、まさに第二次大戦であり、とりわけ、そのうちの独ソ戦争、中日戦争である。つまり、戦前においても、「社会主義」は、「資本主義」にたいして、対等の「力」を保持し、「支配・被支配」の「力関係」などはまったく無かったのである。では戦後においてはどうか？ 戦後の「資本主義」の「経済的・政治的・軍事的な実力」が戦前とくらべて、どの程度高まったかは問題のあるところであろうが、「経済的・軍事的な実力」が「強化」されたこと、したがってこれらの「実力」が「劣勢」になるほど「低下」することはけつしてなかったことは、疑いないところである。もちろん、「資本主義」が「被支配者」の地位に、「社会主義」が「支配者」の地位に、「一変」したなどということもない。戦前戦後を通じて、依然としてあるのは、「資本主義」と「社会主義」との「対立」であり、しかも、「力関係」において相拮抗する「対峙」関係である。ただ、この「対立」関係において、戦前にくらべて戦後は、「社会主義」自身の「経済的・政治的・軍事的な実力が高まった」ために、「社会主義」の側の陣営が、よりいっそう有利になったという点に、変化があるということができよう。だが、相拮抗する「対峙」関係において一方がその「力」を強化すれば、他方もその「力」を強化せざるをえない。「資本主義」は、「政治的、経済的な実力」において「社会主義」が強化されればほど、ますます「軍事的な実力」の強化においてこれをカバーしなければならぬ。したがって、それぞれの「力」の内容、その意味合いには変化がみられるとはいえず、「対峙」関係という意味での「力関係」そのものは、根本的な変化なしといわなければならない。

「社会主義」の「経済的・政治的・軍事的な実力」が強まり、「資本主義」の「経済的・政治的・軍事的な実力」が相対的に、したがってまた絶対的に、少々弱まったからといって、これをもってただちに、両者の「力関係」が「根

本的に変化」したとか、「社会主義が世界政治を主動する要因に、資本主義は受身の立場に」なったとか、「社会主義が優勢・圧倒的で世界史の今後の運動にとって規定的な要因となり、資本主義はもはや規定的な要因とはなりえなくなった」とか、「資本主義は社会主義の支配の下に属するようになった、社会主義の要求をいれないわけにはいかなかった」とか云いたてるのは、両者の間にある現実の「力関係」をまったく無視した皮相な大言壮語にすぎず、煽動政治家のひとりよがりのかげ声といわなければならぬ。

では、「労働者階級と資本家階級」との間「力関係」については、どうか？ これは、佐藤氏がくりかえし唱えているように、首尾よく「一変」したであろうか？

「労働者階級と資本家階級との間の力関係」という言葉そのものが示しているように、ここでは賃銀労働者階級と資本家階級との対抗関係、いかえれば資本制的生産関係の存続が前提されている。つまり、資本主義の存続する資本主義国内部での労働者階級と資本家階級との対立関係が問題となっているのである。³⁷⁾では、第二次大戦後、依然として資本主義国としてとどまっているイギリス、アメリカ、フランス、イタリー、等々をとってみるがいい。そこでは、戦前の「支配者⇨資本家階級の支配力の強化、被支配者⇨労働者階級の抵抗力の強化」という「旧来の力関係」が「一変」して、「支配者⇨労働者階級の支配力強化、被支配者⇨資本家階級の抵抗力弱体化」という「力関係」が生じているであろうか？³⁸⁾このようなことは、問題をはっきり提起するだけでただちにあきらかになる。戦後資本主義国において「労働者階級と資本家階級との力関係が一変した」したなどと主張するのは、明々白々の事実をまげることじついでしかない。

(37) 戦前に資本主義国であったものが戦後「一変」して社会主義国になった場合には、「労働者階級と資本家階級」との「対

立関係」そのものが「一変」して、「資本家階級」が階級としての存立を止揚してしまったのであり、ここでは「労働者階級と資本家階級との力関係が変わったか変らないか」は問題ではありえない。そもそも「両階級の力関係」の存立する基盤そのものが片づけられてしまっているのである。

(38) 「力関係が根本的に一変した」状態、つまり「支配者⇨労働者階級の支配力強化、被支配者⇨資本家階級の抵抗力弱体化」という事態を、ちょっとでも想像するがいい。この「一変した」状態が、この地球上で存続しうるであろうか？ 「力関係」が根本的に「一変」して、労働者階級が「支配力」を握ったときには、労働者階級はただちに一刻の猶豫もなしに——資本家階級の「力」を完全に粉碎し、その階級として存続する基盤そのものを一掃し、資本家階級そのものを廃絶してしまわねばならない。「力関係の根本的変化」、つまり「支配者⇨労働者階級の支配力強化、被支配者⇨資本家階級の抵抗力弱体化」の状态ばかりでなく、「広汎な勤労大衆とひとにぎりの独占体との間の根本的に一変した力関係」の状态が存続していると宣伝してまわる論者は、なんと「ひとにぎりの独占体」にとつてありがたくもかたじけない「平和共存」論者であろうか。

だが、わが「構造改革論」者は、おそらく、ここで問題なのは、資本主義国内部での「力関係」ではなくて、世界における「力関係」なのだと云って、抗弁するであろう。せっかく骨を折って、「資本蓄積の法則」の「力」を——それとプラス、ペテンを——かりて舞台を世界にすりかえたところである。資本主義国内部ではなく、世界的規模においてみるならば、労働者階級全体とは社会主義諸国の労働者階級、プラス資本主義諸国の労働者階級、プラス旧植民地・後進国諸国の労働者階級であり、これにたいして、資本家階級全体はわずかに資本主義諸国の資本家階級、プラス旧植民地・後進国諸国の少数の資本家階級である。世界における労働者階級の「力」が世界における資本家階級の「力」を圧倒しており、この点で「世界における労働者階級と資本家階級との力関係は戦前とは一変した」というべきではないか、という次第である。この抗弁がもっともなものかどうか、すこし検討してみる必要がある。

まず、「世界労働者階級」と「世界資本家階級」とを人数の点で比較すれば、戦後において前者が後者をはるかに

圧倒していることは、疑いない。戦前の資本主義国が社会主義国に変ることによってそれらの国の「資本家階級」がそれだけ減り、「労働者階級」がそれだけ増加したことを考慮に入れれば、また、旧植民地・後進国の農民・手工業者が戦後経済開発のおかげで労働者階級に加わり、それらの国の労働者階級が大幅に増加したことを計算に入れれば、戦前にくらべて戦後の増大はきわめていちじるしく、この点で「変化」があったということもできる。だが、「世界労働者階級」が人数の点で「世界資本家階級」をはるかに圧倒しているという事実は、戦前でも戦後とまったく同じである。このことは、資本主義国一国についてみても、明白に理解される。したがって、人数の点からみて、「世界労働者階級」と「世界資本家階級」との間の「力関係」が「一変」したなどということは、とうてい主張しうるものではない。

では、わがインスタント論者たちの愛好する「支配力」、「抵抗力」という言葉をつかって説明しては、どうか？ 戦前において、当該国内で「支配力」を握っていた「世界労働者階級」部分はソ同盟一国であり、他の資本主義国や植民地における「世界労働者」部分はいづれも「被支配者」として「抵抗力」をもたにすぎなかった。そこで、戦前においては、「世界労働者階級」は全体として、「世界資本家階級」にたいして、「被支配者」の地位にあり、「世界資本家階級」の「支配力」強化にたいして、わずかに、「抵抗力」を強化させるとどまった。だが、戦後においては、「支配力」を握った「世界労働者階級」部分はいちじるしく増大し、残る資本主義国および植民地・後進国諸国での「世界労働者階級」部分の「抵抗力」も猛烈に強化されたのであって、これによって「世界資本家階級」の「支配力」はいちじるしく弱体化し、いまや、戦前とは「一変」して、「世界労働者階級」は「支配者」としてその「支配力」を強化する立場に立ち、「世界資本家階級」は「被支配者」としてその「抵抗力」を維持するのが精一杯

という状態においこめられた、という次第である。このように、「支配力」「抵抗力」という「力」の言葉をつかつて「力関係の一変」を説明しようとしても、その「一変」した状態を思い浮べただけで、その説明そのものが成り立ちえないということは、明瞭に理解されるのである。

問題は、そもそものはじめから、つまり、一方の側に「世界労働者階級」全体を置き、これに対して他方の側に「世界資本家階級」全体を置き、どちらの「力」がどれだけ強いかわ、弱いかなどということ、あれこれあげつらうという、やり方そのものうちにあるのである。これは、ちようど、下手な将棋指しが将棋盤の上の駒の数を比較計算して、駒の数の多い方が「力関係」であるとか、大駒の多い方が「優勢・圧倒的」だなどと知ったかぶりで論じるとまったく同じたぐいである。一方の駒の数が5で他方のそれが6だからといって、「力関係」は5:6であるなどとは、けっしていえない。ましてや、一方は他方にたいして6だけ「優勢・圧倒的」であるなどと云う者がいるとしたら、まさに恰好の笑いものとなるであろう。しかも、将棋の場合には、一方と他方がその自由にしろるいっさいの駒の「力」を集めて相手を撃破しようとして、まさに「力」と「力」との衝突を通じて「力関係」を決定することが、つまり、「力」による戦いにおいて「力」の發揮を通じて「力関係」の結着をつけることそのことが、当面唯一の課題となっている。すべての駒はこの戦闘に加わる一分子としてのみ存在を許され、指し手の統一的指揮のもとに、全体的関連のもとでのみ一箇の戦闘「力」をもつものとなっているのである。ところで、「世界労働者階級」と「世界資本家階級」との間に、右の将棋の場合と同様の「関係」が、したがって同様の「力関係」なるものが、はたして存在しうるであろうか？

まず「世界資本家階級」の側についてみると、かれらは同じ「世界帝國主義体制」を支えるものとして、共通の敵

いわゆる「構造改革論」の理論的性格（六）

をもっており、したがって、同じ陣営に属するものと考えられるが、しかし、かれら自身の内部においてさまざまな矛盾・撞着をもっており、とうてい将棋の駒のように統一的意志のもとにそれぞれ一分子としての「力」を発揮するなどということはできない。しかも「世界資本家階級」にとって当面の課題は、すでにその手の中に所有しており、かつその最大限の発動を保持している諸「力」をもって、さらにより以上の発動を確保し、現在の「資本関係」に支配体制を維持・強化することである。この点は、戦前も戦後も変りはない。「世界労働者階級」の側においては、すでに「資本」の「支配」を脱したものと、まだ「資本」のくびきのもとにあるものという、それぞれの分子のおかれた状態の重大なちがひがある。しかも「世界労働者階級」は、「世界資本家階級」にたいして、「食うか、食われるか」の関係に、いいかえれば、そのいっさいの「力」を挙げての「力」による戦いを通じて「力関係」の結着をつけないければならないその「決戦」の関係におかれているものでもなく、そのそれぞれの各分子のもっておりまた当然に発揮しうべき戦闘「力」もまったく問題になりえない状態のままである。さらにたちいってみるならば、「世界資本家階級」は、「世界労働者階級」の陣営の中に、数多くの、重要な「同盟者」もしくは「第五列」を有している⁽³⁹⁾のであって、これらの「同盟者」あるいは「第五列」のはたらしきによって、「世界労働者階級」の戦闘「力」はいちじるしく減殺され、その各分子が統一的指揮のもとにその「力」を最大限に発揮するどころか、戦闘状態そのものも、いや、戦闘意識そのものすらも、できあがっていない状態となっているのである。

(39) これらの「同盟者」もしくは「第五列」のうち、もっとも大きな「力」をもっているのは、「私的所有」という基本的生産関係そのもの、およびこれと固く結びついて支配しているブルジョアの生産様式、ブルジョアの観念である。これにつぐものとしては、「改良主義者、平和主義者、ブルジョア民主主義者」等々の「雑」社会主義者および「労働貴族」の大群があげられねばならない。「構造改革論」にとりつかれている労働者が、「労働者階級」の「力」になるどころか、これを減殺するも

のであることも、論をまたない。

それゆえ、「世界労働者階級」の一部の者が「資本」の支配から脱してそれら自身独立した「力」をかちとったとしても、まだ過半数の「世界労働者階級」部分が「資本」の支配の鎖につながれている現状において、しかも、「世界労働者階級」の戦線が整備しておらず戦闘態勢すら十分ととのっていないときに、いぜんとして自己の「支配力」を強化・維持しつつある「世界資本家階級」の「力」にたいして、「世界労働者階級」の「力」が「優勢」になったとか、後者が前者にたいして「支配力」をもつにいたったなどと云うのは、完全な自己欺瞞にほかならない。

しかも、過半数の「世界労働者階級」部分が「資本」のくびきにつながれているときに、世界全体としては「労働者階級と資本家階級との力関係が一変した」と称して、「資本」の支配下にある資本主義国の「労働者階級」にたいして、「だから、お前たちの国内での労働者階級と資本家階級、広汎な勤労大衆とひとにぎりの独占体との間の力関係もまったく新たなものに一変したのだ」などと説いてまわるとしたならば、これほど破廉恥な理論的・実践的ペテンはまたとありえないのであろう。こんな主張をマルクス・レーニン主義の創造的発展などと臆面もなく宣伝してまわる手合は、「正真正銘」、「資本家階級」および「ひとにぎりの独占体」の「第五列」つまり「走狗」というのほかないであろう。

ところで、まだ重大な問題が残っている。それは、「社会主義と資本主義、労働者階級と資本家階級との間の力関係が戦前とは一変し、前者が世界政治を主動する要因となったのだ」という、かれらインスタント論者の景気づけ空文句がかりに事実合っているとした場合、かれらはこの「事実認識」にもとづいて、どういふ「結論」をここからひきだそうとしているか、という点である。「労働者階級と資本家階級との、広汎な勤労大衆とひとにぎりの独占

体との間の力関係」が戦前の「支配者⇨資本家階級（およびひとにぎりの独占体）の支配力の強化、被支配者⇨労働者階級（および広汎な勤労大衆）の抵抗力の強化」から「一変」（あるいは、「根本的に変化」）して、「主動者⇨労働者階級（および広汎な勤労大衆）の支配力の強化、受動者⇨資本家階級（およびひとにぎり独占体）の抵抗力の弱体化」という「力関係」が現に存在しているとすれば、「主動者」たる「労働者階級（および広汎な勤労大衆）」は、いかに主動的、その「支配的力」を活用すべきであるか？ その「支配的力」を強化してこの「力」をもって「国家権力」を掌握し、できるだけ早く「資本制的私的所有」を「社会的所有」にうつすことによって、社会主義的変革の基本的課題を遂行しなければならないのは当然であり、またそれこそが唯一の「可能かつ必然」な社会主義への道でなければならぬ。ところが、右のように「支配的力」を握るといふ有利の上もない事態を前にして、わがインスタント論者たちは、自分たちがふりまいていた「支配的」とか「主動」とかいりつばな言葉などすっかりおぼりだして、ひたすら、事を荒だてることのないように、「資本家階級」や「ひとにぎりの独占体」を「収奪」するような大それたことをしないで、ことおだやかに、「資本家階級」や「ひとにぎりの独占体」とも「平和的」につきあい——「平和共存」!!——もっぱら「受動的・消極的」な役割をはたすこと、つまり、「戦争を阻止し、恒久平和をうち立てる」ことだけに専念すべきだと説いてまわっているのである!! 「劣勢」になり「受動的」になり、いまや追「優勢」な「労働者階級」（および広汎な勤労大衆）によって「制限され、弱められ、その基礎を握りくづされいつめられ」つつあるという、まさに「風前のともしび」にひとしい「資本家階級」（とくに、ひとにぎりの独占体）をば前にして、当の「労働者階級」がその「支配的力」を行使して、できるだけ速やかに「資本家階級」（とくに、ひとにぎりの独占体）を「収奪」し、これが階級として存続する根をたちきることを、つまり「資本家階級」（および

独占体) そのものの直接的廃絶を目指してそのいっさいの支配的、「力」を發動させることをつゆほども教えずに、「資本家階級」と仲よく「平和共存」してゆくことこそが、「革命」のもっとも正しい、いや唯一の正しい路線であると言得するとは、なんと、お慈悲深い、「資本家階級」にとつての「救い主」であろうか。

「力関係の根本的変化」とは、従来の革命方式がますます容易に遂行しうる条件があること、したがって、一日も早く「支配的力」を強化して「力」による変革を達成すべき条件がますます成熟していることを示すものにほかならない。「力関係の根本的変化」によって、従来の革命方式が誤りであるとか適當でなくなつたとか、さては「構造改革」という「追いつめ」(「西部活劇」)方式のほうがより正しいとかいう「結論」は、どこからも出てくるものではない。「条件」とは、それによって当の方針が唯一の「可能かつ必然」的方式であることが証明されているとき、はじめて「条件」の名に値するものとなる。わがインスタント論者たちは、「戦後世界の構造的变化」つまり「力関係の根本的変化」をもって「構造改革」の「第三の条件」であると称しているものであるが、なにゆえに、どのようにして、この「力関係の根本的変化」がそのための「条件」となっているかという、肝腎要めの論証については、これっぽっちも説明をあたえていないのである。これでは、「構造改革」の「第三の条件」だといって「戦後世界の構造的变化」という、聞えのよい言葉を並べたところで、ひとはけつして信用しないであろう。いや、信用しないどころか、前文での景氣のよい西部活劇的描写と読みくらべてみて、その底知らずのペテン師ぶりに呆れはてるのが落ちであろう。というのは、佐藤氏の論稿の第一節「構造改革とは何か」のなかで、氏はこの上もなくはっきりと、「構造改革のたたかいは、労働者階級の指導する広汎な反独占統一戦線に結集した勤労大衆が独占ブルジョアジ」とたたかひ、かれらを政治的に孤立させ、経済的によわめ、階級的な力関係をかえ、独占支配を終局的に打倒するた

めの条件をつくり上げてゆくたたかいである」という「格調高い」文章をひけらかしているからである。つまり、「構造改革のたたかい」とは、「資本家階級（およびひとにぎりの独占体）」を「政治的に孤立させ、経済的に弱め、階級的な力関係をかえる」ための「たたかい」である。だから、「構造改革のたたかい」が成功裡に進行しない間は、いや、「構造改革のたたかい」そのものはじまる以前には、「資本家階級（およびひとにぎりの独占体）」は「政治的に孤立しておらず、政治的に強力かつ支配的」であり、「経済的にはるかに強力」であり、「階級的な力関係」は「はるかに圧倒的・支配的」である、ということではなればならぬ。つまり、「政治的に強力かつ支配的、経済的にはるかに強力、軍事的には圧倒的に強力であり、階級的な力関係ではるかに圧倒的かつ支配的」である「資本家階級（およびひとにぎりの独占体）」を向うに廻して、「広汎な反独占統一戦線」を指導して「労働者階級」がたたかうのが「構造改革闘争」である、というわけである。ところが、この「構造改革闘争」が当面唯一の「可能かつ必然」的な方式として日程にのぼってきたのは、どういう「条件」の現出によるかといえ、なんと、それは、「労働者階級と資本家階級との間」の「階級的な力関係」が「根本的に変化」して「労働者階級が圧倒的・支配的力」をもつようになったという「世界情勢の変化」があったからだ、というのである。つまり、つづめていえば、「階級的な力関係」が「根本的に変化」したから、「階級的な力関係」を「一変」させる「構造改革闘争」が必要になった、というのである。なんと、問の抜けた、時間錯誤的な「構造改革のたたかい」ではあるまいか。かれらインスタント政治家たちにとっては、「たたかい」の「条件」はすなわち「たたかい」の「目的」であり、「たたかい」の「目的」がすでに達成されて現存しているところにのみ「たたかい」ははじまるべきものなのである。

ところで、右のように「社会主義と資本主義、労働者階級と資本家階級との間の力関係が一変して、前者が世界政

治を主動する要因となった」ことをもって、「第三の条件」であると称しながら、しかも、右の「力関係の変化」をば「構造改革」に結びつけることをせず、わがインスタント政治家たちは、これをそのまま「戦争を阻止し、恒久平和をうち立て得る展望」というものに結びつける文章をもって、「第三の条件」についての説明を終わっているのである。まるで、「戦争を阻止し、恒久平和をうち立てる」という文句をかかげさえすればそれでもはや万事は問題なく理解されるはずであるともいうようであり、また、これらの文句だけで「構造改革闘争」は完全に正当づけられているはずともいうようである。このように、「戦争阻止」とか「恒久平和」とか「平和共存」とかいう言葉をかかげることによって、簡単に自説の正当性を裏付けようとする試みは、今日、日本ばかりでなく世界的に広汎におこなわれているようである。そして、「世界における力関係の根本的变化」なるものを根拠として、この「変化」により従来の革命方式はもはや妥当しなくなつた、「戦争阻止、恒久平和」こそ唯一の正しい革命路線であるという、政治的議論は、きわめて広汎にゆきわたっており、しかも相当の権威をもって宣伝されてもいるようである。おそらく、わがインスタント論者たちも、このような国際的権威的議論の流行を念頭におき、またその議論の要点を無断借用して、「世界の構造的変化」という少々ちがつた「構造的」表現をつかい、自説「構造改革論」のひとつの「構成要素」に仕立てあげたものであらうし、したがって、「戦争阻止、恒久平和」という言葉をかかげるだけで万事解決、それ以上の説明は不要、と考えたものであらう。そこで、当然の成行上、右の国際的権威的議論の代表的なものについて多少ともたちいった検討を加え、事柄の内容を必要なかぎりにおいて明らかにしておくことが当面欠くことのできな

い課題となるわけである。

(iii) 「平和と戦争の問題」

周知のように、ソ同盟共産党第二〇回大会でのソ同盟共産党中央委員会報告(フルシチョフ)の第一章「ソ同盟の国際的地位」の最後の第六節は、「現在の国際的發展の原則的諸問題」と題されていて、その内容は、「二つの体制の平和的共存」、「現在の時期において戦争を未然に防ぐ可能性」および「さまざまな国における社会主義への移行の形態」の三つの問題をとりあつかっている。われわれは、まずはじめの二つの問題について、『ソ同盟共産党中央委員会報告』がどのような説明を与えているかを、簡単にみてみよう。

まず、「平和的共存」について。この「平和的共存」(мирное сосуществование)とは、任意の二つの国あるいは二階級の間の「平和的」な「共存」を指すものではなく、明確に「二つの体制」すなわち「社会主義国と資本主義国」との間の「平和的共存」のみを指すものである。このことは、表題「二つの体制の平和的共存について」——そのものが端的に示しているところである。また、この「平和的共存」という「原則」は、「ソ同盟の対外政策の一般方針」であり、「戦術的な手段ではなく、ソヴェト対外政策の基本原則」とされており、そのような「社会主義国の対資本主義国の対外政策の基本原則」としてのみ問題とされているものである。この点は、しかと銘記される必要がある。ところで、なぜ、この「平和的共存」という「対外政策」の「基本原則」をここで提起しているかといえは、その理由として、つぎの二点が——『報告』での説明を通じて——挙げられるようである。

その第一は、いわゆる「ソ同盟の侵略的意図」についての悪宣伝を封じ、「資本主義と社会主義との二つの体制の競争で社会主義体制」は「平和的共存」の道を通じて「勝利する」ものだという平和的「方針」を裏付けようとして

いることであり、第二は、「現存の諸条件のもとではほかにすすむべき道がない」こと、「事実、二つの道しかない。一つは平和的共存の道であり、もう一つは歴史上もつとも破壊的な戦争への道である。第三の道はあたえられていない」ということを根拠にしていることである。

「ソ同盟の侵略的意図」についての悪宣伝を封殺することはきわめて適切であるが、しかし、「社会主義体制」の「勝利」が「平和的共存」における「競争」を通じて達成されるべきだという「方針」がここに示されているものとするれば、はなはだ問題である。そこで、報告のなかから該当箇所をつぎに引いてみよう。

「われわれが、資本主義と社会主義の二つの体制の競争で社会主義体制が勝利するというとき、それは、この勝利が資本主義諸国の内政に社会主義諸国が武力干渉することによってかちとられるという意味ではけっしてない。共產主義にたいするわれわれの確信は、社会主義的生産様式が資本主義的生産様式にくらべて決定的な優越性をもっているということにもとづいている。まさにこのために、マルクス・レーニン主義の思想が、わが国と人民民主主義諸国の数百万の人々の意識をとらえているのと同じように資本主義諸国の広汎な大衆の意識をますますとらえているのだ。われわれは、世界のすべての勤労者が一たび共產主義がもっている優越性を納得したあかつきには、おそかれはやかれ、社会主義社会の建設のためのたたかいの道をあゆみだすものと確信している。わが国で共產主義を建設することにあたって、われわれは断乎として戦争の勃発に反対する。われわれは、ある一国で新しい社会制度を樹立することは、その国の国民の内政問題であるとおねに主張してきたし、現在もそう主張している。これが偉大なマルクス・レーニン主義の教えにもとづくわれわれの態度である」(《XX Съезд Коммунистической Партии Советского Союза. Стенографический отчет》, т. I, Москва, 1956. стр. 35—36. 邦訳『ソ同盟共産党第二〇回大会』第一分冊、合同出版社、四二二頁)

ージ)。

まずわれわれに奇異に感ぜられるのは、「二つの体制の競争(Соревнование)」でどちらが「勝利するか」というような問題の出し方そのものである。これは、ちょうど二人の選手が百メートル競争で「どちらが勝つか」を争うのを問題にするのと同じである。この二人のうちのひとり、「平和的」にはなく、「相手をなぐって」「武力干渉」— 走ることによって「勝利をかちとる」ことが許されないこと、当然に「平和的・友好的」に走ることによって「勝利」をかちとらねばならぬものであることは、平凡な常識である。この同じ平凡な常識をあてはめて、「平和的競争」で社会主義の「公正な」勝利をかちとるべきだというのが、ここでの基本的な考え方である。このような「競走」的考え方からすれば、両者の「勝負」をきめるのは、もっぱらどちらの体制がよりすぐれているかという「優劣」のみであることは、けだし理の当然である。いまや、国際的檣舞台の上で社会主義のチャンピオン・ソ同盟が一方の側に立ち、他方に帝国主義のチャンピオン・アメリカが立ち、両者が「平和」的に競走して、どちらが「優れているか」を世界の人民に判定してもらおう、というわけである。もしこの競争、つまり経済力の競走において、ソ同盟がより「優れている」ことが示され、「世界のすべての勤労者が共産主義の優越性を納得したあかつきには、かれらはそこでやおら、社会主義社会の建設のためのたたかひの道にはじめて歩み出すもの」と、当のチャンピオンたるソ同盟は「確信している」、といっているのである。だが、ソ同盟は、残念ながら、まだ社会主義の段階であって共産主義ではない。ソ同盟ではまだ二十年たつてからようやく共産主義を建設する基礎ができあがる予定であるにすぎない。だから、共産主義が基本的に建設されるには、どんなにすくなく見積っても三、四十年はかかるはずである。その間に「戦争」があれば、さらにはるかに長時間を要し、おそらく五、六十年以上の歳月をかけなければ、「共産主義の決

定的優越性」を実証することはできないであろう。だから、ソ同盟としては、できるだけ短時間に「共產主義の優越性」を実証するために「断乎として戦争の勃発に反対する」必要がある、というわけである。

ごらんのように、ここにあきらかに示されているのは、世界における社会主義の終局的勝利を「かちとる」ためにはいかなる道をとらねばならないかということ、いいかえれば、世界における社会主義革命運動の一般の方針と見透しである。これはもはや、社会主義国の「对外政策の基本的原則」の問題ではなく、はるかにこれを超えるものである。にもかかわらず、この世界における社会主義革命運動の一般の方針についても、同じ「平和的共存」をもってその「基本原則」となすべきだと主張するとすれば、これはきわめて重大な論理的錯誤を犯すものであり、また見方をかえれば、とうてい許されない論理的詐術であるといわなければならない。ところが、『報告』は、右のような「平和的共存」を「基本原則」とする世界革命運動の一般の方針をもって「偉大なマルクス・レーニン主義の教え」にもとづく」と主張しているのである。はたして「偉大なマルクス・レーニン主義の教え」が右のような方針を支持するものかどうかということを判断するためには、マルクス・レーニン主義の古典についてたらいた論究をおこなう必要はない。右の方針の具体的内容を若干整理して論理的に順序だてて表現してみるならば、それだけで事理おのづから明白になるはずである。そこで右の方針の内容をすこし整理してつぎに示してみよう。

世界のすべての国を社会主義に変革するという、世界革命運動の進行はつぎのようにおこなわれる。——第一に、現在の社会主義国（ソヴェト同盟）が経済力の増強に大いに努力を傾ける。これが、基本である。そのためには、相当の時間と犠牲が当然に要求される。その他の資本主義国内部あるいは後進国内部で「戦争」に導くおそれのある革命運動はいっさい「断乎として」抑えられる。経済建設にはなによりも「平和」が必要だからである。第二に、社会主

義国および人民民主主義国の勤労大衆も、資本主義国の広汎な大衆も、「社会主義が資本主義よりも決定的に優れている」ということを眼のあたり見なければ、「マルクス・レーニン主義の思想」をその「意識」の中にとりいれないものであり、ひとたび経済力の増強が達成されて社会主義の決定的優越性が事実をもって示され確認されるようになったところで、世界のすべての勤労者は社会主義社会の建設のためのたたかひの道にはじめて歩みだすはずである。もちろん、この社会主義社会建設にあたって「平和的共存」の「基本原則」は守らねばならぬ、つまり、第三に、社会主義の決定的な優越性を眼のあたり見せられ確認できたところでやっとたちあがった勤労大衆は、「武力」などの破壊的方法に訴えることなく、もっぱら「民主的」「平和的」に社会主義社会を建設することを心がけなければならない、と。

要するに、この一般の方針の中味をつらぬいているのは、プロレタリアートも勤労大衆もすべて物質的利益を第一としてそのために行動するものであり、社会主義の経済力増強によって決定的優越性が示されなければマルクス・レーニン主義の思想など「意識」の中にとりいれられることはありえないし、ましてや社会主義社会の建設になどとりかかるものではないという、物質的利益至上主義である。また、「共産主義⁽⁴⁰⁾がもっている優越性」が実証され確認されるまでの長年月の間、マルクス・レーニン主義の思想を「意識」の中にとりいれることのできない広汎な勤労大衆は、資本主義を打倒するような「破壊的」革命闘争をいっさいさしひかえて、「二つの体制の競走」を見守っていないければならぬのであって、これはまさに、世界革命運動の強化ではなく、停止であり、むしろその封殺ともいうべきものである。このような世界革命運動の方針が、「偉大なマルクス・レーニン主義の教えにもとづく」ものどころか、まさにその教えを裏切り、これを正反対のものに改ざんするものにほかならないことは、いまさら論をまたない

ところであろう。

(40) この「共産主義」という言葉によく注意されたい。「社会主義」と「共産主義」とが質的にことなつた発展段階を示すものであつて、「社会主義」は広義の共産主義の第一段階にすぎず、「決定的優越性」なるものが動かしがたく実証されるのは「社会主義」ではなく、より高度の「共産主義」でなければならぬということ、すでに周知のところである。右の『報告』も、この点について、明白に「わが国は社会主義から共産主義への漸次的移行を実現しつつある」と述べられている。

(ついでながら、この「漸次的移行を実現しつつある」という言葉は、きわめて不正確であり、また、社会主義と共産主義との本質的差異、とくに生産関係および分配原則における根本的ちがいをあいまいにし、社会主義から共産主義への移行はけつして「漸次的に」「なしくじり」に少しづつ「実現される」ものでないという、基本的「発展関係」を完全にインペイするものといわなければならない。)ところで、現在において、たとえソ同盟がどのように「もっとも発達した資本主義国よりも、はかり、しれない、ほど、高い、生産増加速度をしめしている」(前出、『報告』、四四ページ、訳五五ページ、傍点—山本)としても、なお「人口一人あたりの生産水準からみると、われわれはいまのところ、主要な資本主義諸国にまだたちおくれしている」(前出、四四ページ、訳五五ページ)うえに、資本主義諸国(とくにアメリカ)の食糧(小麦)に依存しなければその最低必要量すらカバーしえないというような経済的実勢のもとでは、とうてい、「決定的な優越性」は「社会主義」の側にあるものとして実証されえず、「世界のすべての勤労者」は、「社会主義社会の建設のためのたまたかの道をあゆみはじめる」わけにはいかなのであつて、むしろ、現在の「資本主義」を改革して「平和、労働、自由、平等、友愛、幸福をもたらす資本主義」をつくるための、「平和的・民主的改良のための道をあゆみはじめる」という公算の方がはるかに大きいといわなければならないであらう。

ところで、「事実、二つの道しかない。一つは平和的共存の道であり、もう一つは歴史上もつとも破壊的な戦争への道である。第三の道はあたえられていない。」(前出、『報告』、三六ページ、訳四三ページ)という主張は、さきの「平和的共存」の「基本原則」を裏つけるための「根拠」としてかかげられているのであるが、このような「問題の立て

方」そのものに、きわめて重大な問題がひそんでいる。はたして、「第三の道」はないかどうか？

これは、事実そのものが、簡單明瞭に答えているところである。「帝国主義」が爪の先まで武装して「社会主義」を包囲し、その重武装した軍用機が国境周辺をたえず飛び廻って一方では威嚇・挑発を続けるとともに、いつ、いかなるときにも、適当な口実と機会をつかむことができればただちにその攻撃武力を発動して侵入し、干渉をおこなうと狙っており、他方「社会主義」の側でもこれに備えて反撃に必要な兵力、装備を配置してつねに警戒状態にあるという現実の事態は、いったい、「平和的共存の道」であるのか、それとも、「歴史上もつとも破壊的な戦争への道」であるのか？

このような事態を前にして、「二つの道しかない」というのは、まったく正しい。ただし、その「二つ」とは、「平和共存の道」と「歴史上もつとも破壊的な戦争への道」との二つではけっしてなく、まさに「戦争するか、戦争しないか」の「二つ」でなければならぬ。もし「戦争する」とすれば、おそらく「歴史上もつとも破壊的な戦争への道」になる公算は大きい。したがって、その「一つの道」が「歴史上もつとも破壊的な戦争への道」であるというのは、一応誤りないものと見なすことができよう。だが、「いま一つの道」すなわち「戦争しない」ということは、けっして「平和的共存」ということではない。頭のてっぺんから爪先まで武装して虎視たんたんと攻撃の機会を狙って包囲している者と、その侵略を防ぐために必要な武力を動員してたえず警戒につとめていなければならない者との間において、いったい、どこに真の意味の「平和」があるであろうか？ 両者の間にあるのは、「敵対関係」であり、しかも、「体制的に」いいかえれば「本質上」相容れることのできない「対立関係」である。もつとも発達した「資本主義国」すなわち「帝国主義国」で「国家権力」を握っているのは支配階級たる資本家階級であり、独占資本であ

る。その「独占資本」⇨「資本家階級」を強力的に打倒して「資本主義」をば労働者階級の支配する体制に変革したのが「社会主義」である。「万国のプロレタリア」いいかえれば「世界革命軍」は、つぎつぎに「資本主義」の「社会主義」への革命的変革をおしすすめなければならず、またこの「世界革命運動」を主体的におしすすめることをもって、その歴史的使命とするものであるということは、周知のところである。一国で勝利し「社会主義」をうちたてた「世界革命部隊」部分は、当然に他の「資本主義」の革命的変革という歴史的事業にその可能なかぎりの「力」を傾けなければならぬ。「資本主義」の側では、打倒され早晚没落すべき歴史的使命にある当の支配階級は、「世界革命部隊」が強化され、自国内の「墓掘人」⇨プロレタリアートが階級的意識をもって革命的闘争にたちあがるのを喰い止めるために必死になってあらゆる「力」を動員せざるをえないのであって、国家権力の強化、「強力」ななく武力の強化はもっとも決定的なものとなる。「社会主義」国内でますます拡大強化される「世界革命部隊」部分と資本主義国内「部隊」との連携強化をたちきり、自国の必然的変革⇨没落を喰いとめるためには、当の「社会主義」国を「力」をもって包囲し、その影響力をできるだけ完全に除去しなければならないのであって、そのためのもっとも確実な方法は、「社会主義」国を「強力」によって征服⇨支配すること以外にはありえない。「資本主義」国の支配階級⇨「帝国主義」者がその自由にしうるいっさいの手段、方法をもって「力」を強化し、「国家権力」を最大限に強化すると同時に、攻撃的・侵略的武力を同じく最大限に強化することは、かれら自身の維持⇨存続そのものによって規定されているのであって、あらゆる「力」⇨とりわけ「強力」⇨のよりいっそうの強化こそ、かれらの存立そのものの支柱をなしているのである。

さきにのべた「資本主義」の必然的没落、すなわち「社会主義」への移行⇨転化、この移行⇨転化における「世界

革命部隊」の主導的・決定的役割、および、「資本主義」Ⅱ「帝国主義」の存立の支柱としての「強力」の整備・強化——これらはいづれも動かすことのできない歴史的な發展法則であって、これらの發展法則そのものをはじめて明確にし、これらの法則が現実にとどのような諸条件のもとでどのように貫徹しているかを正確に把握することによって變革の主体的勢力がもっとも科学的かつ合理的に実践すべきことを指し示しているのが、ほかならぬ「偉大なマルクス・レーニン主義」である。それゆえ、「資本主義」と「社会主義」とが、「ただたんにたがいにならんで存在できるばかりではなく、それ以上のことができる」と云って、両者が本當に仲良く、平和に、お互いに「武力」やその他の「力」はすっきり片つけてしまつて真に友好的に、手を握りあい、「協力することが必要である」（前出、『報告』三六ページ、記四三ページ）などという主張をかかげる者がいるとしたならば、その者は、底知らずのおめでたい人物か、そうでなければまことにずるがしこいイカサマ師、といわなければならない。

われわれが事態を判断したり、また世界史の發展について見透しをたてたりするばあいには、右の法則がいかに現実貫ぬいているかということの把握を第一の基本とし、また中心としなければならぬのであつて、この観点に立つとき、「社会主義」と「資本主義」との「平和的共存」なるものは、たんに「戦争なしの、対峙関係」という現実の事態についての、不正確な、そして自分を欺瞞し、善意の第三者をも欺瞞するおそれのある——ただし、この「敵対者」たる、「資本主義」そのものは、けつして、欺瞞されることのない、——美辭麗句にすぎないことは、あまりにもあきらかである。そしてまた、この「平和的共存」という言葉とならんで用いられる「恒久平和」という、まことに響きのよい言葉も、「資本主義」と「社会主義」との「並存」Ⅱ「対立関係」を前提してなおかつこの言葉を用いるとすれば、これまた、まったくの自己欺瞞的妄語というのほかないものである。「恒久平和」という言葉が真に意味する事態が現

存するときには、すでに「恒久」とか「平和」などということはまったく重要な意味をもたないもの、つまりおよそ問題となりえないものになってしまっているのである。だが、そのような事態を現出するためには、なによりもまず「力」による「資本主義」⇨「帝国主義」の打倒、つまり「平和的共存」の「強力的廃棄」が先決問題である。

それゆえ、「偉大なマルクス・レーニン主義」の見地からすれば、「平和的共存」というのは、まさに「社会主義国」の「資本主義国」⇨「帝国主義国」にたいする外交政策にすぎず、しかも当面の「力関係」⇨「対峙関係」のもとのみとらねばならぬ一時的な、いわば「戦術的」政策にすぎないのであって、これを「対外政策の基本原則」として「恒久」的に固執したり、あるいは、これをもって「世界革命運動」の一般の方針に仕立てあげたりするのは、まったく誤りであり、自己欺瞞的行為といわなければならぬのである。ところが、『報告』は、「平和的共存」が「世界革命運動」の一般の方針あるいはその「基本原則」として唯一のものでなければならぬことをさらに力強く説得するために、「第三次世界大戦」の脅威を説き、「戦争に反対する闘争」の必要とその強化、すなわち「平和共存のための闘争」の必要とその強化による「戦争阻止」の保証とを説いているのであって、それが、「現在の国際的発展の原則的諸問題」のうちの第二の部分、すなわち、「現在の時期において戦争を未然にふせぐ可能性について」の説明である。

つぎに、「戦争を未然にふせぐ可能性」について。

この問題についての『報告』の説明は、きわめて簡單明瞭のように思われる。それは、つぎのような運び方でおこなわれている。

まず、第一に「帝国主義が存在するかぎり、戦争は不可避である (Неизбежна)」という、マルクス・レーニン主

義の「命題（ПОЛОЖЕНИЕ）」をとりあげ、この「命題」が妥当するのは、きわめて限られた歴史的時期、つまり、「第一に帝国主義がすべてを包括する世界的体制であり、第二に戦争に利益を感じない社会勢力と政治勢力が弱く、……帝国主義者に戦争を放棄させるだけの力がなかった時期」（前出、三七ページ、訳四四ページ）だけであるという。第二に、「帝国主義のもとでの戦争の経済的基礎しか検討しないのが普通だが、これでは不十分である。戦争は、たんに経済現象であるだけではない。戦争がおこるかどうかの問題においては、階級勢力の相互関係、政治勢力の相互関係、人民の組織の度合とその自覚した意志とが大きな意義をもっている。さらに一定の条件のもとでは、進歩的な社会・政治勢力のたたかいは、決定的な役割を演ずることができる」（前出、三七ページ、訳四四ページ）という点が指摘され、そこで、第三に、戦前にくらべて「現在では、情勢が、根本的に、変化している」という、例の「力関係の根本的変化」を挙げて、「今日では、帝国主義者が戦争をはじめのを阻止することができる実質的な手段をもった強大な社会・政治勢力がある。この勢力は、帝国主義者が実際に戦争をはじめようとするならば、侵略者に破滅的な反撃をくわえ、かれらの冒険的な計画を挫折させるだけの力をもっている」からして、「戦争は宿命的に、避けられないものではない」（前出、三七―三八ページ、訳四五ページ、傍点―山本）という「結論」が正しい、ということに落ちついているのである。この説明を少し吟味してみよう。

最初に銘記すべきは、ここでとりあげられているのは、「人類は、第三次世界大戦を経験しなければならないのだろうか？」という「疑問」にたいする「マルクス主義者」の「答え」である（前出、三六ページ、訳四三ページ）ということ、したがって、もっぱら問題は「世界大戦」にあって、その他の「戦争」ではない、ということである。ところで、今日世界を大別するのは社会主義陣営と資本主義陣営との二大陣営であり、したがって、この両者をふくむもの

でなければ「世界大戦」ということはできない。帝國主義国同志の間で戦争が起るとしてもその可能性がまったくないわけではないが、帝國主義諸国の中でのアメリカの圧倒的支配的地位、とくに軍事力におけるその断然たる優勢という事実と、そのような戦争が結局において帝國主義国内部の崩壊、つまり、社会主義への必然的移行をもたらさざるをえないという危険な見透しとの二つによって、それらの間の武力的衝突は小規模なものにとどまって、世界の規模の戦争に進展することは、まずありえないものと考えられる。したがって、起りうべき世界戦争としては、社会主義諸国と帝國主義諸国、しかもソ同盟を主とする社会主義陣営とアメリカを主とする帝國主義陣営との全面的な武力的衝突が考えられるだけである。つまり、問題となりうるし、また問題とすべき第三次世界大戦は、社会主義陣営と帝國主義陣営との戦争、つづめていえば、ソ同盟勢対アメリカ勢ということではなければならぬ。

このような社会主義対帝國主義の全面的武力闘争としての世界大戦を考えると、『報告』で述べているような「帝國主義のもとにおける戦争の経済的基礎」という問題のとりあげ方が、いったい、どれだけの意味をもつであろうか？ 『報告』は「こうした情勢のもとでは、帝國主義があるかぎり戦争をおこす経済的基礎は存続するというレーニン主義の命題は、もちろん、なお効力をもっている」（前出、三七ページ、訳四五ページ）と述べ、これにすぐつづいて「われわれが最大の警戒心を發揮しなければならないのは、このためである。」と説明しているが、このように社会主義陣営対帝國主義陣営の世界大戦の「基礎」をもつばら帝國主義における「経済的基礎」に求めるのは、まったく皮相・一面的であり、誤りというのほかない。このことは、「資本主義の全般的危機の激化」⁽¹⁾という、流行の言葉の意味を簡単に考えてみるだけでも思い知られるところである。この「全般的危機の激化」の段階では、帝國主義の存立そのものが深刻な危機に直面しているのであって、そこでの武力衝突は、「経済的基礎」よりもむしろ「政治的

「基礎」により多く依存しているのである。帝国主義陣営が社会主義陣営にたいして戦争を挑むのは、それ自身の存立そのものが危殆に頻しているときであり、社会主義の犠牲において自己の地位の保持あるいは強化を図ろうとするものであり、それ自身の生死をかけての最後の必死の政治的闘争である。さきの「レーニン主義の命題」なるものは、帝国主義が世界包括的な体制であるか、または社会主義が一国にとどまっていた段階に妥当するものであって、そこでは、まだ、帝国主義の存立そのものが問題になるという「政治的基礎」はきわめて弱かったのである。この第二次大戦以前の段階に妥当する「命題」をもってきて「情勢の根本的に変化した」戦後について相変らず「世界戦争をおこす経済的基礎」があるとか、「そのためにこそ、われわれは最大の警戒心を發揮しなければならない」などと主張するのは、まったく「根本的变化」を忘れはてた御都合主義のおしゃべりといわざるをえない。むしろわれわれが「最大の警戒心を發揮しなければならない」のは、「全般的危機の深刻な激化」にともなう「戦争の政治的基礎」でなければならない。

(41) 『報告』の第一章第二節「資本主義諸国の経済情勢と資本主義体制の諸矛盾のいっそうの激化」の中には、「資本主義の全般的危機」という言葉が一回出てくる(前出、一四ページ、訳一〇ページ)が、そのパラグラフ全文は、「資本主義の全般的危機はひきつづき深まっている。解決できない資本主義の矛盾、近代的な生産力と資本主義的生産関係との矛盾はますます激しくなっている。近代技術の急速な発展は、この矛盾を克服せず、それを強めるだけである」というものであり、この第二節を通じて述べられているのは、もっぱら「経済的基礎」に結びつく「経済的」な諸矛盾ばかりであるが、このような「全般的危機の激化」についての一貫した「経済的」説明は、まことに特徴的といわなければならないであろう。

『報告』に述べられているように、「情勢が根本的に変化した」ことは事実であるが、しかし、それは、「戦争」

の問題にかぎっていうならば、社会主義国対帝国主義国の関係についてのみであり、簡単にいえば、社会主義の「経済的、政治的、軍事的実力」の格段の強化によって社会主義にたいして直接武力攻撃を加え世界戦争を惹きおこすことが帝国主義にとってまったく望み薄いものとなったからであり、この種の世界戦争は必然的に帝国主義内部の崩壊、すなわち社会主義への革命的移行を招来せざるをえないという「歴史的法則」を帝国主義者たちが——二度の大戦の苦がい経験を通じて——学びとっているからである。だが、帝国主義そのものの本質については「根本的変化」はありえず、したがって帝国主義国内部における「力」による支配と並んで、他のいっさいの国にたいする、あらゆる「力」を動員しての支配の拡大、強化は、——社会主義陣営の強化に対応して——ますます切実なものとなつてきているのであって、この場合、あらゆる「力」による支配の達成の中には、いうまでもなく、「武力」の行使によるもの、いいかえれば戦争を通じる諸方法がふくまれているのである。したがって、帝国主義の本質そのものが全く変化せず、むしろ、「強力」による支配への必然的傾向がますます強められ発現しつつあるときに、社会主義にたいする直接的な戦争、しかも世界戦争だけを問題とし、この両陣営間の世界戦争を「未然に防ぐ可能性」ばかり論じているとしたならば、これは「世界革命運動」の指導という見地とはまったく縁のない、社会主義一国の利益のみに関心をもち「愛国主義」の見地に堕ちたものというべきである。

「戦争」にかんする『報告』の説明において、そもそもから問題なのは、「世界戦争が、宿命的に避けられないものかどうか」というような「問題提起」そのものである。「宿命的に避けられない」(фатальной неизбежности)とは、「人間の意志でどうすることもできない、不可抗力的に勃発するもの」ということである。だが、はたして戦争は、「人間の意志でどうすることもできず、人間が甘んじて受けなければならないもの」であるか？ このような

考え方は、まったく誤りであり、およそ問題となりえない。戦争は、支配階級が明確な目的をもち、綿密な計画のもとにいつさいの「力」を意識的に動員し、強固な意志をもって最後まで、能動的におこなうものである。この戦争をとらえて、「宿命的に避けられないものかどうか」などということをして「問題」にすること自体、戦争についての完全に逆立ちした観念を示すものである。同じように、「戦争がおこるかおこらないか」などという論じ方も、完全なピンボケである。問題とすべきは、帝国主義者は「戦争という強力的手段に訴えるか訴えないか」であり、その「強力的手段」に訴えようとする帝国主義者の手をどのようにして抑えるべきか、ということではなければならない。しかも、その「強力的手段」は、直接社会主義陣営にたいする全面的世界戦争ばかりでは、ないのである。

以上、「平和と戦争の問題」についての『報告』の説明を簡単に検討しただけで、われわれには、そもそもその問題の提起の仕方そのもの——「平和的共存か、しからずんば全面的世界戦争か、二つにひとつ」——が、きわめて意図的なものであり、「偉大なマルクス・レーニン主義の教え」を完全に裏切るものでしかないことは、あきらかである。帝国主義者がソ同盟中心の「社会主義」を直接全面的に武力攻撃して世界戦争をはじめのを阻止することは、現在きわめて重要な意義をもつことではあるが、しかし、世界戦争への着手を阻止して「最大の警戒心を發揮し」ていなければならぬ。「対峙関係」を指して「平和的共存」と呼ぶのは全く自己中心的錯誤であり、またこの「戦争阻止」状態を永く続けること——「恒久平和」!!——ができればそれで目的は叶えられたことになるなどと云うのは、およそ歴史的発展法則をわきまえないまぬけな小ブルの自己欺瞞的妄想といわなければならない。

第一に、社会主義を直接相手とする全面的世界戦争に訴えるという方法が、きわめて困難かつ危険であることは、当の帝国主義者がよく計算に入れているところである。だが、そのような世界戦争でない、それ以外の戦争は、いく

らでもやれるし、また現実によってもいるのである。たとえば、社会主義国の周辺にある従属国を主役に仕立ててこれに对社会主義の戦争をやらせることは、天下周知の「手」である。また、後進国で国家権力を握っている者が多少とも「社会主義的」であるときに、「親帝国主義」の一派に武力を供与して戦争により国家権力の奪取をおこなわせること——いわゆる「革命政権」の樹立——は、帝国主義者の後進国支配の常套手段となっている。周辺の従属国を主役に仕立てての帝国主義者の社会主義への武力攻撃がおこなわれて帝国主義者の砲火、爆撃によって夥しい貴重な血が流されているときに、また、後進国でのカイライ一派による「社会主義者」の大量殺戮がおこなわれているときに、「戦争は、はたして宿命的に不可避であるか」を「問題」にしたり、「世界戦争は防ぐことができる」などと「結論」づけたりしてみたところで、いったい、どれだけの意味があるというのであろうか？ これらの局地的戦争がくりかえされている事態を前にして、「平和的共存か、全面的戦争か、二つに一つ、第三の道はない」などというおしやべりが、なんと底知れずに間抜けであり、また底知れずに悪質であることか。

第二に、全面的戦争によらずとも、また局地的戦争によらずとも、それ以外に、帝国主義者は、その「支配・強制の体制」を確保し強化するために必要な、さまざまの「力」を十分もっており、またこれをつねに行使して自国民ならびに他国民の隷属——「賃銀奴隷の体制」を固めているのである。したがって、それらの支配、抑圧の強化方法のひとつとしての戦争を阻止することは、そのこと自体としてきわめて多大な意義をもっているものではあるが、しかし「マルクス・レーニン主義の教え」に照してみれば、つまり世界革命運動の主体的指導の見地からみれば、それではきわめて不十分であり、決定的な意義はもちえない。「戦争という手でいくか、『平和』という手で行くか」は、帝国主義者がその支配・抑圧体制の維持と強化のための不可欠の二つの方法のちがいにすぎない。問題は帝国主

義者の支配・抑圧体制の確保、強化という「本質」にこそあるのである。この点からみると、「戦争」をもっぱら論じたてている当の『報告』が、「戦争は、別の、強力的な手段による政治の継続である」という、かのクラウゼヴィッツの有名な格言の意義をすっかり忘れはてていることは疑いない。「マルクス主義者は、この命題を、それぞれの戦争の意義を見るさいの理論的基礎であるといつも考えてきたが、それは正しかった」(レーニン全集、第四版、第二十一卷、三七六ページ、訳三〇ページ)という、「偉大なマルクス・レーニン主義の教え」を忘却して、どこに「戦争の問題」の正しい解決があるうか。

× × ×

さて、「戦争阻止、恒久平和」という「革命的」スローガンについての国際的権威的説明の内容は、およそ以上のとおりである。だが、われわれの当面的問題は、高度に発達した「資本主義」国、「国家独占資本主義」国の内部的変革すなわち「革命」にある。わが「構造改革論」者たちは、その「構造的改革」を合理化せんがために「戦争阻止、恒久平和」なるものをここにとりいれてきたのであるが、これはおそらく、さきの『報告』が「平和的共存、戦争阻止」について第三に「社会主義革命」の問題をとりあげており、あらかじめ明らかにされた「平和と戦争」についての「基本的態度」、「基本的原則」をもって「革命」の問題を「解決」しようとしているのと、その軌を一にしているものであり、おそらくは後者の権威的論法をそのまま踏襲してのことと思われる。そこで、われわれは、つぎの節で、「構造改革論」の「理論的性格」を究明するにさきだつて、その究明のための必要な知識を得るために、まず最初に、右の『報告』の中の第三の「社会主義への移行の形態」についての説明を検討することにしよう。